目の病気で失明しないために

加齢黄斑変性「食生活の欧米化などが原因」

緑内障「自覚症状が乏しく発見困難」

40歳過ぎたら検診を

「老化現象と考えて放置する人が多いが両目とも発症する割合が高い」と木許講師

木許賢一講師

「緑内障の多くは慢性疾患なのでかかりつけ医をつくることが大切」と久保田教授

久保田敏昭教授

大分大学医学部の公開講座が、大分市のコンパルホールであった。「目の病気で失明しないために」のテーマで、眼科学講座の久保田敏昭教授が緑内障について、木許賢一講師が加齢黄斑変性について講演。「失明を防ぐためには早期発見、早期治療が大切。40歳を過ぎたら眼科で定期検査を受けてほしい」と呼び掛けた。

久保田教授は「緑内障は網膜の神経線維が減少して視野が狭くなる病気で日本人の失明原因の第1位。患者数は全国で300万人、県内で2万～3万人と推定されているが、実際に眼科を受診しているのは2～3割とされている。日本人に多いのは正常眼圧緑内障。眼圧が正常で自覚症状が乏しく、視力検査、眼圧検査、眼底検査で見つからないこともある」と説明。

「最近は網膜の神経線維の厚さなどを測定する検査機器が開発されており、正確な診断ができる。緑内障の疑いがあると言われたら、本当に緑内障か検査し、診断がついたら進行をできるだけ遅らせる治療が必要。まず点眼治療をして、眼圧が十分に下がらなければ手術が必要になる。ただし、治療しても失われた視野は回復しない。緑内障の多くは慢性疾患なのでかかりつけ医をつくることが大切」と話した。

加齢黄斑変性症は網膜の中心にある視力に最も重要な「黄斑」に異常が起こる病気で欧米では成人の失明原因のトップ。国内でも増加しており、患者数は70万人と推定されている。

木許講師は「加齢、食生活の欧米化、喫煙などが主な原因。初期には気付きにくいが、中心部が暗く見える、視界がゆがむ、コントラストが低下するなどの症状があり、放っておくと徐々に視力が低下する。老化現象と考えて放置する人が多いが両目とも発症する割合が高く、症状があれば眼科を受診してほしい」と話した。